
規格外の行く道（仮）

楽隠居

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

規格外の行く道（仮）

【Nコード】

N9490Z

【作者名】

楽隠居

【あらすじ】

最初東方に行つてからだいたいのところで別世界に行きますが、しばらく東方になると思います。間違い、指摘、気になる点がありましたら感想の方に書き込みお願いします。

プロローグ（前書き）

自分の勢いで書いてしまったので駄文だと思います。

こついう小説が苦手な方は閉じるボタンでウィンドウを閉じていただいても構いません。

プロローグ

ここは何もない空間、そこに一人のジジイが座っていた。

「さて、こいつはいつになったら起きるのかのう」

俺はその言葉に気がつき、体をひねった。

「お、こいつようやく目覚めるのか」

「あ、あと五分」

ふう、全く、人の眠りを妨げやがって。

「いつまでもグースカ寝るんじゃない！はやく起きろアホ！」

野太い怒鳴り声と腹部への衝撃を感じ、俺は目を開けた。

「痛ててて、休日の朝くらい長く寝かせてくれても……」
「コ、コ、ド
コ？」

目を開けると見知らぬ光景、周り一面真っ白の空間だった。

「こいつは、そうじゃのう。神界の一部と想っとくれ」

俺の目の前のジジイは変な妄言を吐いた。つーかこのジジイ誰だ？

「妄言などではない！本当のことじゃ！それにワシ神様じゃし。」

は…？神様？おいおいいい加減にしてくれよ。全く、頭がボケたか。
「頭はボケてないわい！今のお前の体を見てもそんなことが言えるか？」

体？別におかしいとことか……ん？

「ええええええ！体がねえ！は？なぜに？Why!!！」

え？マジ体無いんだけど。やべえよこの状況。

「ふう、ようやく自分の状況が理解できたかの？」

「どうなってんだこれ」

いや、マジヤバイ、本当にヤバイ。

「ふっふっふ。教えて欲しいかの？」

くそっ、なんか笑い方がむかつく。まあまず話を聞いてみるか。

「ああ。で、どうして俺はこんな姿なんだ？」

「ふむ。では教えてやろう。お前は死んだのじゃ。」

やっぱり俺は死んだのか。

「で、それから？」

「ん？なんかもつとこうリアクションはないのかのう？」「えええええ

「!まじで!」とか「嘘だろ。そんなの。」とか

「いや、だいたい分かるだろう体が無い時点で」

「いや、まあそうじゃが、でもリアクションくらい欲しい」で、それで?」「……………は?」

「いや、死んだのは分かったとして、もっとなんか有るだろ。死因とか、なぜここにいるとか。」

「話は最後まで聞いて欲しいのう。…で、死因じゃったか、それはまあ、こう自然の摂理から外れたような感じ」「早く言え」「わしが殺したのじゃ」

「まあ、そのくらいは予想できる」

「なら聞かんでよかったじゃろう」

「はっはっは。どういつ答えが返ってくるかと、つい。」

「はあ、もう疲れたわい。では話すとしようまず理由からじゃが、おまえ、アニメとか漫画が大好きじゃな?」

「ああ。」

「ワシ、神様の中でも最高神より上の創造神の地位での、暇だったんじゃ。」

「これまたなぜ?」

「うむ。ワシとても偉いじゃろ。それでいう、みんながワシの負担を減らそうとしてのう。最終的に仕事
が回って来なくなったのじゃ。」

「いや、自分でもらいに行けばいいじゃん。」

「何回かそうしたわい。でも皆が「私たちがしますので創造神様は休んでください」と言ってくるのじゃ」

「まあそれは取りづらいな」

「そうじゃろう。それで暇になったワシは自分で仕事を作ることにしたのじゃ」

そうなるとその仕事っていうのはやっぱり。

「それが俺、と」

「そうじゃ。最近おまえのいた世界では転生モノとかそのへんが流
行っておるじゃろ。」

「まあそうだが……ソユコト？」

俺に転生しろと

「うむ。お前の考えとる通りのことじゃ。嬉しいか、嬉しいじゃろ
う。」

「ああ、嬉しい。だが一つ聞かせてくれ。あんたはなぜ俺を選んだ

「？」

「ああ、そのことかのう。それはな、おまえの想像力が豊かで面白くなりそうだったからじゃ。」

「そうか。分かった。で、どこに転生させてくれるんだ？」

「ふっふっふっふ。それはのう。おまえの好きな東方の世界へ行かせてやる。」

このジジイ流石神様だ。

「マジか！やったぜ！で、で？俺はなんかもらえるのか？」

「うむ。いくつか特典をやる。それくらい自分で考えてもらっても構わんぞ。」

こいつ、転生の話辺りからテンションとかがガラツとかわったのう。

「少し規格外になってもいいか？」

「うむ。構わん。ワシ、創造神じゃから大体のことは出来るからのう。ただし、あまり強すぎるものは少し制限を掛けさせてもらっぞ。転生してすぐに暴走とかになったら話にならんしの。」

「ああそれで構わない。」

「マジで暴走とかそんなことになったらこちらも暇つぶしにならんからのう。案外人間を眺めるのも楽しいから期待しとるぞ。」

「分かっているつもりだ。」

……考え中……考え中……考え中……考え中…………終わり……

「この4つでいいののう？」

「ああ。」

「でも、この4つじゃ心配じゃからサポートとかワシと通信できる端末とかもオプションでつけとくからのう。」

このじいさん結構いい奴だな。

「サンキュー。で、これからもう出発か？」

「いや、まだじゃ。おまえには体とか名前がないじゃろう。それを今から決めるからのう。」

「そういえば体がなかったな、それに名前もおまえとしか呼ばれないな。」

「じゃからそこらへんの情報を決めるために、この人形に入ってもらうぞ。」

「このマネキンみたいな人形に？どうやって？」

「はいろつと思えば入れるはずじゃ。まあ試しにやってみい。」

いやいや、そんな曖昧な説明をされても。

「ごうか？いやごうか？くそっ、わからん。」

「入れんか？まあ長い間使ってなかったからのう。仕方ないから強引に入れてみるぞ。」

「マジでかって」グッググググググ

「痛い痛い痛い痛い痛いーいー！」ゴリユ！

「（嫌な音がしたのう…）；。ゝ。ゝ。ゝ。ゝだ、大丈夫かのう？」

「な、なんとか……………」

「（ふう。良かったわい）じゃ、じゃあこの端末に名前を記入してくれ。その他の情報はワシが書き込むからのう。」

「イテテ…ん？これでいいか？」カタカタカタカタツ カタンツ

「ふむ。まあいいじやろう。その他は後で設定紹介で紹介するからのう。しかし、名前が『神羅』、これでいいかのう？」

「いいだろ、別に」

「まあ基本的なことはワシがしておいたからいいとして。おまえは

どの辺に行きたいのじゃ？」

「どの辺って言うത്？」

「時代じゃよ時代。どのくらいに飛ばすか言ってくれ」

そうだな……。能力の確認もしたいから……。

「結構前の人がない辺りで頼む」

「分かった、でh「ちょっと待て。「なんじゃ？」

「俺はお前をなんて呼べばいい？お前の名前をまだ聞いてないんだが。」

「ふむ。そう言われてもものう。名前などないからのう。お前の好きに呼ぶといい。」

「俺の好きに……か。」

こいつあれだろう、神様だろ？で、俺を転生させるんだろ？ん？
転生？つまりは俺を新しく生み出すってことだろ？ってことはこいつは俺の産みの親？で、こいつジジイだろう？だったら呼び方は一つしかないな。よし！

「決まったかのう？」

「ああ。よろしくな、『親父』！」

「お、親父じゃと！なぜそうなった。」

「え？そりゃああなたは俺を転生させる、つまり、世界に新しく生み出すじゃないか。だからこそあなたは俺の親だ。という訳でよろしくな親父！」

「うむ。まあ好きに呼べといったのはワシじゃからなあ。まあいいじゃろう。」

「それじゃあ親父、転生よろしく。」

「うむ。それでは行くぞ。」

「ああ。」

さーて、地面に穴か？それとも扉か？どういつぶつにするんだ？

「ではっ！セイツツッ！！！」「ゴインツッ！！！」

「ウガアアア！」

な、なんとという力技。親父、そりゃないよ。ガクッ……。

「ふむ。それにしても親父とは、面白い奴じゃったのう。まあ、こいつがどうこれからを歩むか、見守るしかないのう。」

ブログ（後書き）

何処か誤字脱字があったら教えてください。

これから受験シーズンですので更新は受験が終わってからになると思います。

設定（転生完了時）（前書き）

主人公設定載せます

設定（転生完了時）

名前：創理つくり 神羅しんら

能力：「幻想と現実を司る程度の能力」

属性：中立・中庸 特性：矛盾・混沌

能力値（平常時） f a t e 風

筋力：C - 魔力：C +（気含む）

耐久：D 幸運：D +

敏捷：B 宝具：n o t h i n g

神様から貰った力

1・「幻想と現実を司る程度の能力」

2・武器

上の1の能力に沿った内容のアイテム。

鍵型の「幻想之主」と本型の「現実之書」

どちらもそれぞれの能力に沿っているので、

能力の端末としても使える。

3・改変・改造能力

何かに効果、属性を付加、追加したり、形状や特性を変えることが出来る。

4・世界樹の苗木

その名のとおり、世界樹の苗木、

5・神様からのオプション

身体能力や容姿、情報、助言、その他の設定等
「便利なものをいただいた。」

名前：親父おやじ

職業：神 神格：「創造神」

容姿：白く長い髭の老人

悩み：仕事がない、

欲しいもの：仕事

最近まで暇だったので、主人公のサポートをするときに

不意打ちをかけたります。それほどまでに退屈な生活をしていた。

暇なときは人間の生活を眺める等暇つぶしをしていた。

転生完了！（前書き）

今回も思いついたものを書きました。

転生完了！

頭が痛い……。

まさか転生の方法があんなだとは思わなかったぜ。

「くっそ、親父め、今度会ったら一発殴ろう。絶対に。」

ピロリロリ

俺がそんな感じの決意をしている時、ズボンのポケット辺りから音が鳴った。

そっぴや俺の格好を伝えておこつと思つ。一言で言つとジャージだ。

今の俺の格好は装飾のないただのジャージだ。そんなことはいいとして、俺はポケットの中から板のようなものを取り出す。

「なんか、スマホみたいだな。」

『おおっ！つながったつながった。ふいー、良かったわい。さて、つながったということは、おまえ、そこにおるじゃろう。』

親父だ。俺をぶん殴った親父だ。

「ああ。いるよ。」

『ふむ。無事に転生できたようじゃの。』

「転生する際に頭殴るってどういうことだよありゃ。」

『いやー。スマンのう、毎度お馴染み！みたいな奴じゃつまらんくなるじゃろう。少しは別パターンでやってみんといかんじゃろ。そっちの方がワシ楽しいし。』

「ずいぶんと自分勝手だな、オイ」

このジジイやっぱアホだ

『ゴホンッ！では今の状況について教えようかのう。今の時代は人が最初に月に行く前……………ではなく。そのヒトが人になる前位じゃ。』

マジか。それなら能力の確認をしやすいじゃないか。

『次に能力のことじゃ、おまえの能力に少し制限をする。最初の出力はせいぜい10%位じゃのう』

「マジか、でもなぜ10%位なんだ？」

『おまえの能力はコントロールが完全になるまで数千年はかかるじやろう。それにおまえの魂、存在自体に刻ませてもらったからのう、馴染むまでに時間がかかると思うぞ。』

「そうk『それに』ん？」

『今のおまえには能力の出力的に1,2%位しか操れん、あまり大きなことをすると暴走するかもしれんからのう。まあ、頑張るしか

ないのう。』

「仕方がない。ま、どんなことができるか確かめるしかないか。」

『あ、それとお前は能力がまだコントロール出来てないから練習のために数百年不老にする腕輪が何かを送るからのう。』 ピッ

「切れた……………」

さて、アイテムを送るって言ってたがどこから来るんだ？

ヒュウウ~~~~ン

空から何か落ちてくる音！上か！

俺は顔を上げる。すると空から袋が落ちてきた。ふむ。あれか。

しかし俺が袋を掴もうとしたとき、下から何か俺の顎に高速でぶつかった。

「ガフツ…くそ…お…やじ……………」

箱のようなものが当たったようだ。しかしそこで俺の意識は途切れた。

ただひとつだけ言わせてもらう。意識が途切れる前にチラッとみえたクソ親父のニヤケ顔のイラストはとてつもなく……ウザかった。

転生完了！（後書き）

もう一話いけるかな？

能力確認

くそう、頭がグラグラする……。

「あのクソ親父め……。」「

俺は顎をさすりつつ俺を二度も気絶させたクソ親父の顔を思い浮かべていた。

そういえば何か送るって言ってたな。

「この袋か？」「

俺は端末をポケットに入れてから袋の中を探った。

「なんだこれ？」「

その中に入っていたものは親父が言っていた腕輪と手紙だった。

まあニヤケ顔のイラストは置いといて

「えーと、なに」「

『この手紙を見ているということは目が覚めたようじゃのう（笑）』

親父が気絶させたくせにこの冒頭はムカツク。

『まあ、ワシはここから見ておるから起きたことくらい分かるがのう。』

クソ親父。全部見てるのか。余計にムカツク。

『まあそんなことはさて置き、中身の説明をするぞ。その腕輪おまえの老化を数百年止めるものじゃ。』

その間に能力の修行をするといい。その間に人間が知能をもつじやろう。あと多分能力が馴染むまでに

数千年かかると思うんじゃ。その間はコントロール出来ても30、40%までじゃろうな。それと最後

に、忘れておったが「世界樹の苗」だったかのう？あれはお前の近くに鉢に入れておいとるからのう。

あの苗は普通の木の大きさになるのに数千年かかるぞ。まあ育つてくるとその木からマナが発生するか

ら育ち具合が分かるじやろう。そこまで育つとほかの木と同じ位の速度で育つようになるじやろう。』

ふむ。まあまあ分かった。つまり俺のすぐそばのこの鉢が世界樹の苗、と。

「よし。今調べても仕方ないからな。とりま、能力確認しますか。」

親父から貰った能力は「幻想と現実を司る程度の能力」、俺が何故

この能力にした理由は応用が利くから

だ。幻想と現実をということは自分の想像つまり幻想を現実に持つてくること。簡単にいえば「具現」

や「実現」だ。これが出来るからこそ俺はこの能力を選んだ。解釈の仕方によるが「だいたいのこと」が

できる能力「極端にいうと」なんでも出来る能力「なのだ。

しかし、俺はまだコントロールが出来ないのでまずはそこからだ。

「よし。まずどこまで出来るか試さないとな。」

そう言い俺はまず棒を想像する。

「実現」

そうつぶやくと自分の手の中に1mくらいの木の棒が現れた。

「ふむ。」

と言って握ると、ポロポロと砕け始めた。

「まだまだか。」

このあと数十年くらいこつこつという修行が続いた。

早い進化

能力の修行を始めて200年ほど経った位の頃。俺は違和感を感じていた。少し前にヒトを見たんだが、

土器を作っていたり、竪穴式住居みたいなものを作ったりしていた。

「あまりにも進化が早すぎるだろ」

そう。俺が修行している間にヒトは知能や言語をもち、急激に進化していた。

ジュジュッ

ん、この機械音は……。親父。久しぶりだなあ。

『久しぶりだのう。元気にしておったか。』

「親父、久しぶり。と言いたいが……………」

『うむ。おまえの言いたいことは分かっておる。人間の進化の速度じゃろっつ…』

「ああ。いくらなんでも早すぎるだろっつ。」

『そのことじゃがのう。何らかのきっかけがあったんじゃろっつ。1つの発見でも色んな選択肢が生まれ

るからのう。』

「まあある程度したら少し会いに行ってみるか」

『まあ対応としてはそれでいいじやろう。それにしてもおまえ、少しは能力のコントロールが出来るようになったようじゃのう。』

「ああ。棒とか球みたいな単純なものは完全に具現化出来るようになったぞ。」

『ふむ。おまえも進化が早いのう。出力としては15〜20%ってところかのう。』

「ま、そのくらいだろうと思うよ。でも刀とかは失敗しやすいけどな。」

『まだ武器類は難しそうなのう。』

「ああ、そのへんなんだよ。まだ芯の部分かな。」

『ふむ。そのことじゃったら簡単なことじゃ。おまえは今まで普通のもの、見本通りに作ろうと思っとう。じゃが、それが原因なんじゃよ。』

「普通のものを作ろうするのが悪いのか？」

『いやいや、悪いとは言わん。ただのう、その価値観に縛られすぎるとるのじゃおまえは。その能力はお』

まえの、おまえだけの能力じゃ。ワシはそうなるようにおまえにそ

の能力を渡した。言ったじやろう、

おまえの《存在自体》に刻んだ、と。基本は大事じゃが、それじゃああまりにもつまらん。応用するこ

とこそその能力が活けるとこじやろ？まあ何かのマネをしていたから暴走しなかったのじやろう。しか

し、少しは別の方向性で作ってみてもいいと思うぞ。改造能力もおまえにやったじやろう。少しは使っ

てみるんじや。自分の幻想をそのまま形にするそう思っているじやろう。』

「自分の幻想を形に、ねえ。」

やってみますか。そう思い想像する。まずは鉄の棒。

鉄の詳しい構成など要らない。ただ単に鉄であれ。脆くない。ただ硬い鉄であれ。

実現

すると俺の手の中には黒い棒が1本現れた。

『どれ、貸してみる。……ふむ……ふむ。完全な鉄……じゃな。』

なんじやろう、鉄は鉄で間違いないのじやが、この微妙に含まれる物質が分からん。

まあ気にせずともいいじゃろう。いまは完全に成功したことを喜ぶべきか。

『よくやったのう。他に何か感想はあるかのう？』

「ああ。自分の幻想を形にすることのコツは分かった。だが他の物も出来るかどうかを試したい。」

『いくらでも試すといい。時間はたっぷりあるからのう。』

こいつ、進歩が早いのう。この速度じゃと物体以外もいけるかもしれんのう。

それから俺は同じようなことを繰り返した。

このとき、俺は自分の能力の凄さを改めて感じた。

しかし、この後の俺は集中のしすぎでまた気を失うのであった。

早い進化（後書き）

こんな感じの長さで上げていきます。

情報収集

親父にアドバイスを受けてからこれまた2000〜3000年が経った。

最近の人間の進化、発展は凄まじく、100年前くらいから、移動手段が機械類になったようだ。

ちなみに俺はというと、山奥の洞窟に拠点をつくり4000年くらい暮らしていた。たまに人間の様子を

見に行くが、行くたびに服装や乗り物の形が変わっているのには驚いた。

あれ？俺の時間の感じ方。おかしくないか？

そして最近は人間以外にも人型だったり狼型？の所謂妖怪、らしいものも増えてきた。

いや、昔もいたよ。3000年くらい前も、でもあの時代、まだ妖怪の方が知能が低くてね。

意思疎通がしづらかったんだよ。でも最近言葉を話す奴も出てきたようだし。今度喋りに行った方がいい

いか。ずっと能力の修行してたし。

能力の修行、と言えば。俺の能力、大体のことはできるようになってきた、と思う。

あと、ずっと放置してた世界樹の苗木が大体1mより低いくらいになった。そして何か粒子を少し出し始めた。

めた。これが マナ だと思う。

そうそう能力の方だが、武器は大体出来る。が、光学兵器とか複雑なものは思い浮かべづらいから実現

しづらい。原型があれば後はどうとでもなる。そういうものだからこの能力。

しかし、妖怪、か。人間も街の外側に何かの柱を建て始めたからなあ。

仕方ない。一度人間のところで情報を集めるか。そう言いそこらへの街より一回りも二回りも大き

い、まさに“都市”と呼べる場所の近くに

「やって来たわけだが。」

どうするかね。今まではその辺りの近場の街を見て回っていただけなんだが。

こんだけ大きいと警備が厳重だろうな。

今までの街は割りと自然が多く、観光地みたいなくところだったのであるうほど外からの客が多く、大体

のことは人ごみに紛れて誤魔化せたんだがなあ。

今見ている都市は周りを高い壁で囲み、関所があるほどの都市だ。いかにも重要拠点だとか、偉い人い

ますよ。とか、すべての中心ですよ。みたいね感じで、中心部にはかなり高いビルがある。

「本当、進化しすぎだろ。」

仕方ない。ちょっと面倒だが、能力で切り抜けるか。

(想像するのは自分。誰にも見つからない自分。ただの空気と変わらない自分。)

実現

「ふう。」

これで周りと同化したはずだ。

今回は空気と変わらない自分なので、一応気体になれる。

が、長く気体のままだと戻るのに時間がかかる。だからギリギリ3秒……位が限界だと思う。

さて、潜入開始。

まず、関所のゲートだが、門に走っていき、開くタイミングで気体

へ。

そうすると他人はただの風としか思わない。

抜けたらすぐに実体に戻る。これで中に入ったのだが。この後どうするかねえ。

.....移動中.....

という訳で、偉い人がいそうなビルの中にやって来ました。

みんなは全く気づかない。まあそうだろうね。

仕方ない、親父に通信してみるか。

.....ピッ

「親父ー。久しぶりー。聞こえてるか？」

『おお。聞こえておるぞ。久しぶりじゃのう。そっちからかけるの初めてじゃのう。』

「ああ。聞きたいことがあるんだが。」

『その事じゃろっ？任せておけ。』

.....情報伝達中.....

「ありがとな。親父。」

『よいよい。ではのう。』 プツッ

親父から情報を貰った後、それを元に情報を集め、また中心のビルに戻っていた。

「さて、後は大きな情報でもとってきますか」

出会い

それにしても広いな、ここ。

情報収集に来た俺は、都市の中心のビルの中で迷っていた。何故かというところ。

「同じような部屋ばっかだな。」

そう。内装が同じような部屋が沢山あるのだ。まるで仮眠室のような部屋が。

ただ仮眠室となると、何らかの研究をしている施設も兼ねているんじゃないかと思う。

機密の情報や研究のデータは外に出したくないだろうからな。

多分だが、ここは研究機関と政治、役所を兼ねている、まさに中枢なんだろう。

少し難しいだろうが、何らかの機密情報が得られそうだな。

「虱潰しで探すしかないか。」

そう思いつつ俺は行動を再開した。

当たり前なんだが、すれ違う人々は俺に気付かない。弱い風を感じる位だろう。

休憩室から、倉庫、トイレ、会議室、ホール、お偉いさんの執務室まで一通りまわってみた。

「ん？この部屋はなんのための部屋だ？」

もう一通り見てまわったところ、俺は誰か個人の部屋の様な所を見つけた。

「ここ…は、誰の部屋だ？」

このビルのなかで一人部屋か？だとするととんでもない人物だな。

「何か資料はないか？」

俺は本棚辺りから調べ始めた俺は、その後、机の一番下の引き出しに入っている封筒を見つけた。

「これは？」

封筒の中の紙に書かれた文字を見ると、

「妖怪対策と月への移住計画について？」

これはどういうことだ？妖怪対策？何故その必要が？

そう。俺はする必要が無いと考えているのだ。

妖怪はまだ弱すぎる。ここまでの技術力を持った人間達ならば、なんの問題もないように感じるからだ。

そもそも妖怪は人の感情から生まれる。恐怖や不安が主だろう。

その程度なら別に脅威にはならないんじゃないか？

と、俺が考えていると、後ろから誰かが部屋に入ってくる音がした。

その人物は入ってきて最初にこう言った。

「あら、そこにいるのは誰？」

声から察するに、女性のようだ。

「ッ……！」

俺に気づいたのか？いや、普通気付かないはずだ。

今の俺は、空気と同じレベルの、有って当たり前、居て当たり前の認識のされ方をするのだから。

そう思っていると、その人物が言った。

「私の部屋で何をしているの？あなた、ここ人間じゃないわね。」

どうやら俺は完全に気づかれていたようだ。仕方ない。

俺は能力を切り、姿を現す。

「あら、見ない顔ね。まあいいわ。それよりここで何をやってたの？」

あなたが手に持っているものを見ればひと目で分かるけど。」

この女性には敵わんか。状況的に見て、警備を呼ばれると面倒だ。

正直に話してみるとしよう。場合によっては交渉できるかもしれないからな。

ただまず、俺の気になる点が一つある。

「お前、どうやって俺に気づいた？」

俺が質問すると、目の前の女性は、そんなの簡単よ。と言って、

「これよ。」

と一言、こっちに何かを見せてきた。手のひらに収まる程度の端末だった。

端末の画面には2つの点が映っていた。ま…まさか。

「なんだこれは？」

俺は一応聞いてみる。すると女性は

「ただの感知器、センサーやレーダーの一種よ。試作品だけどね。」

そう言った。だがそれだけで分かるものなのか？

「なぜそれだけで分かった？」

俺は再度聞く。すると女性は。

「まあね。でもこれは試作品、ちゃんと動作するかわからなかったんだけど。」

この部屋に入ったときに反応があったの。生命反応がね。

それに私が「何してるの？」って聞いたとき、あなた動揺したでしょ？

そのときは心拍センサーに反応があったわ。それでもうほとんど確定。でも部屋に入った最初から

分かっていたわ。だって私の部屋に勝手に入る人がこの都市の中にいるわけではないもの。

入った時点で重罪だしね。」

この女性には絶対に敵わんな。そう思っていると。

「それより、あなたがしていたことを説明してくれるかしら。」

仕方あるまい。

説明中

「なるほどね。まあいいわ。」

ん？こいつ、今何と言った？

「お前、通報しないのか？」

「ええ。それとも、通報して欲しい？」

「いや。してもらわない方が助かるが、いいのか？」

「いいのよ、あなたは私が捕まえたのだから、その扱いも私の自由でしょう？」

まあそういうことなのだろうが、大丈夫なのか？

「そんな事して大丈夫なのか？お前の立場的に。」

「大丈夫でしょう。ここで私に意見できる人はそんなにいないわ。」

こいつ、それだけの立場なのか。

「そんなことよりあなたの名前は？」

名前だと？

「あなたの名前よ。なんて呼べばいいか分からないじゃない。」

そういうことか。

「神羅だ。創理 神羅。」

「そう。神羅ね。それで、あなたがどうやってこの都市に入ってきたのか教えてくれるかしら。」

「ちょっとまってくれ。俺はお前の名前を聞いてないんだが。」

俺はこの女性の名を聞いていない。だが、女性の容姿を見るに、誰かは分かってしまう。

「私？私の名前は?????。」

………聞き取れないかしら。ならこっちの名で呼んで頂戴。私の名は」

この、半分赤、半分青の服装。そして銀色の髪を後ろで三つ編みにして束ねているこの女性。

この容姿から推測出来る人物、未来では月の頭脳と呼ばれ、蓬萊の薬を作った、

東方projectの原作登場人物。その名は

。

「永琳。私は八意 永琳。皆からはそう呼ばれているわ。」

これが俺と原作登場人物の最初の出会いだった。

質問（前書き）

今回かなり強引になってしまいました。

質問

俺は永琳と出会い、潜入方法を説明した後。自分の能力を教えた。

「なかなか興味深いわね。あなた。」

永琳はそう言った。

「こんなに何かに興味を持ったのは久しぶりだわ。」

永琳はこう言うが、いったい他は何に興味を持ったのだろうか。

永琳は人間の中の天才と呼ばれる中でもトップクラスの頭脳を持っているようだ。

そんな彼女が興味を持つものとはいったいどんなものなのだろうか。

「あら、何か気になることでもあるの？」

そう考えていると、永琳が話しかけてきた。

「お前は心が読めるのか？」

俺は何も喋っていない俺に対して、心を読んでいるかのような発言が気になった。

「いいえ、読めるわけじゃない。表情で分かるのよ。今まで何

千、何万人と腹の探りあいをしていてから。」

そういうものなのか？

「そういうものよ。そんなことより聞きたいことは？」

そういうものか。ひとまず聞いてみるとしよう。

「お前みたいな天才が興味を持つほどのものがそんなにあるのか？」

俺は自分の疑問をぶつけた。

「そりゃあるわよ。昔から代々続く家系に不思議な力があつたりとか、今の人間の進化のきっかけとか。」

なんか両方気になるな。

「不思議な力？」

「ええ。その家の人は代々不思議な力を持っている人がいるの。その人のいる地域の時間の進み方が早くなったりするみたいない感じで、まるで時間の感じ方が範囲の外と違うようになるみたいなの。」

それで一部の進化が早いのか？

それにしても時間だけあつてもなあ。

数百年間生きているんだが、外部から技術が入ってきていたのか？

「なあ、ここの技術は誰が発展させているんだ？」

「私よ。ここ、そうね、外の時間では200年くらいかしら。まあ私が生まれて少しからはね。それ以前は道具によって発展したらしいわ。」

「道具？」

「ええ。一番昔で言つと、鉄製の棒とかかしら」

棒？それってまさか

「後になってくると色々形が変わっているものも発見されているけど。」

色んな材質のものだったり、見つかるたびに解析したり、用途を考えたりしてるわ。」

親父、異常な進化の背景には、俺の能力の修行があったようだ。

「なあ。ここの時間の流れは外の何倍なんだ？」

「時間？そうね、100倍以上かしら。」

となると、俺の修業中500年ほどで50000年以上か。

ずいぶん長いな。

そう思っていると永琳は

「でももうすぐその時間の進み方は変わるわ。その力をもった人が少なくなってきたの。」

私はその力を研究して、極限まで老化を止める薬をずいぶん前に開発したわ。

でも、飲んでくれなかったわ。自分達が研究されている感じが嫌って言うてね。」

それに、と永琳は続ける。

「最近以外の妖怪が増えてきて、力が強くなっているようなの。」

それに対し俺は

「でも今の技術力でも十分対抗できるだろ？」

「ええ。でも妖怪は数が少ないかわりに生命力や力が私達とは比べ物にならないの。」

そして私たちが進歩するように、向こうも進化するの。

だからこそ私は結界を作ったわ。こちら側に妖怪がこないように。」

それでも俺はそこまでする必要がないと思った。

「そこまでする必要が本当にあるのか？」

「普通の妖怪には必要ないわ。でも時々力が飛び抜けた個体もいるのよ。」

知能は低いんだけど。その分凶暴だね。街の中に入ってきたこともあるわ。」

もしかして街の周りのあの柱は結界のためのものか？

しかし本当に気になるのはあの資料の計画だ。

妖怪と何か関係があるのか？

「なあ。月に行く必要があるのか？月って石だらけじゃないのか？」

「月？ああ移住計画ね？あれは私たちの都合よ。私たちは寿命があるじゃない？

最近は穢れというものが寿命の原因があるように考えられているわ。

その穢れが地上に溢れているから、穢れない月に行こうって話よ。

それに、人間の技術力を使えば月くらいすぐに住めるようになるわ。」

「そのあとの街はどうなる？」

「破壊するわ。跡形もなく。」

「そんなことしたらこの星が大変なことになるぞ。」

「仕方ないじゃない。ここの技術を妖怪たちが使わないようにするだけよ。」

私たちも必死なのよ。人間全体を考えるとね。」

まあそう考えると納得できなくはないが……………。

「これで計画の基本的なことを話したわ。

この話はここでお仕舞い。あなた、今日はここに泊まっていけばいいじゃない。」

まあこれ以上話しても変わらないか。

「ああ。そうさせてもらおう。」

俺はそう言い、一日を終えた。

質問（後書き）

強引で本当にすみません。

移住（前書き）

時間が少し飛びます。

移住

俺は今、都市の中心のビルの一室にいる。

時間軸的には永琳と出会って200年以上経っただろうか。

人間が月に行くのは数日後だろう。

そして、親父からもらった腕輪に最近ビビがはいつてきた。

そんな時、俺は何をしているかというと。

「うーん。まだ厚いか？」

能力であるものを作ろうとしていた。

「それにもっと広くしないとなあ。」

俺が作っているもの。それは

「もっと硬いものじゃないと盾にはならんな。」

そう。盾である。それも結界を応用したものだ。

もちろん普通の盾くらいは作れる。

しかし俺が今作ろうとしているものは攻撃を反射する仕様のものだ。

そのための盾の形を作るのだが、できるだけ膜のようなものをつくるつもりだ。

出来るだけ薄くし、見えづらいものを作りたいんだがなあ。

「難しすぎる……………」

これ、完成するのか？

そう思っていると後ろから永琳が、

「あら、まだやっているの？よく飽きないわね。」

と言う。

「永琳。来てたのか。」

「今さつきね。そんなことより、私たちはもうすぐ月にいくんだけど、あなた、本当に残るの？」

永琳が来た理由はそれか。

そう。俺は月には行かない。

そもそも俺が行く必要性を感じない。

誰が好き好んで岩だらけの場所に行くだろうか。

「そう言うなら仕方ないだろうけど。私たちが月に行くときは気を付けて。」

都市と街、全部爆発するから。」

まあそうしたら妖怪は結構死ぬと思うけどね。

まあ一つ不安なのは妖怪なんだけどね。

何か最近妖怪が活発なんだよな。

月に行く際には一箇所に人が沢山集まるから

妖怪が誘われてきそうなんだよ。

人の多いところに沢山現れる節があるからなあ。

「まあ都市から離れていれば大丈夫と思うわ。」

まあその時はそのときだな。

そして、移住前日。

人間の全員がこの都市の内部に集まった。

ついに明日、出発か。

「明日、か。」

俺は今都市から離れていた。

「それにしてもやっぱり大きいな。」

都市は俺が来た時より1回り大きくなっていた。

しかし、長かったな。

それにもう親父からもらった腕輪が碎けそうだ。

嵌めているところが痒い。

そう思っているよ、

ミッポポポポ。

という音が鳴った。

なんかひさしぶりだなこれ

と思いつつ端末を見る。

『おお。久しぶりじゃのう。おまえ、ワシのこと忘れとったじゃろ
』

いやー、まあ間違っではないな。

「親父、なんでこのタイミングでかけてきたんだ？」

『うむ。おまえに送った腕輪がそろそろ外れる頃じゃとおもっての
』

「まあ碎けそうっちゃ碎けそうなんだが。」

『それ、碎いてもよいぞ。』

「は？」

『いや、それ、碎いていいぞ。その腕輪が能力のストッパーなんじ
やが。もう必要ないじゃろ。』

「そうだったのか？」

『うむ。外したらもっと自由度が増すじゃろうし。今のお主じゃったら大丈夫じゃろ。』

「そついうことなら……。」

ていつ　パキッ

俺は腕輪を叩いて割った。すると、

……………ブワッ！

割った瞬間、俺の周りに風が吹いた

『外したことでもっと簡単に能力を使えるじゃろう。』

俺は自身の中に何かの力があるのを感じた。

『何かを感じるじゃろう？』

「ああ。しかし、なんだこの感じ。」

『それはあれじゃ、霊力や魔力じゃろう。』

「それはどう扱えばいいんだ？」

『知らん。おまえならなんとかなるじゃろつ。イメージじゃよ、イメージ。』

また、そんなアバウトな。

「まあいいか。で、他になんかないのか。」

俺はそう聞いてみる。

『そうじゃのう、あと言いたいことといえはのう。人間たちが襲われとるといふことくらいかのう。』

「そうか、人が襲われて

」

は？

ええええええええええええええええ。

「おい、それを先に言ってくれよ！」

俺がそう言った瞬間。

ドオオオオン！

という爆音が聞こえてきた。

移住（後書き）

適当になってきてすみません。

妖怪集結

神羅と親父が話している頃

都市近郊。

「よし。全員集まったか？」

そう言ったのは周りのやつより一回り大きい人型の個体。

「もう少しで集まります。」

そういうのは少し小さめの個体。

今ここへは数万の妖怪たちが集まっていた。

「そうか。向こうには気づかれるなよ。」

この妖怪を束ねている妖怪は集団の中でも長く生きている奴だった。

この妖怪は火の妖怪である。

人間は火の発見により暖をとり、厳しい冬をも越える術を得た。

加熱することも覚えた。また、金属の加工にも火が必要である。

しかし、火は大変危険である。すぐに人の命を奪えるものである。

故にこの個体は生まれた。仲間からは連火れんがと呼ばれている。

そして長く生きていることで強大な妖力を得た。

「あいつらが油断している今なら行ける。」

そう。人間は油断しきっている。結界があるから安心しきっている。

そこを突くためにこの日を選んだ。

そして人間が月に行くという情報を得たものもいる。

例えば人間の社会が情報社会だとする。そこで、人を騙し嘘の情報を流す者が現れるとする。

そうすると誰かが引つかかる。そして、そのことに対して、怖いと思う人が増える。

そうなると情報や嘘に対する恐怖から新たな妖怪が生まれる。

だからこそ妖怪は増える。このようなことがある故に妖怪と人間は進歩し増えつづける。

妖怪たちは怖いのだ。今まで地上にいた人間が月に、自分らの知らないところへ皆で行く、

というところ。

そして残った我々はどうなるのだ、と。消えてしまうのではないかと。

だから妖怪も行動を起こした。人間が月に行く前に消えるかは分からない。でも、それでも不安なのだ。

自分らは何もしていないのに消えるかもしれない。ということだ。

この可能性に、理不尽に抗いたいのだ。

だからこそ襲う。襲わずには居られない。

そして、全ての人間に、人間の心に。

恐怖を。根源的な恐怖を刻むために。

妖怪たちはもう止まらない。その総てを持って挑む。

敵わないのは分かっている。しかしその事実には抗いたい。

何もせず消えるのは悲しいから。

腕が飛ぼつと構わない。

足が飛ばつと止まらない。

妖怪たちはただ進む、死に絶えようとも進む。

別に恨みなどない、ただ魂が疼くのだ。

魂が人間を求めるのだ。

妖怪としての本能が叫ぶのだ。

人間の恐怖から産まれた故に。

血が欲しい。

肉が欲しい、と。

しかし思考の中心にあるのは生物としての本能。

ただの生存本能。

皆は同じ思いを持ち突き進む。

ただ一つの思いを持って。

ただ一つ。

消エタクナイ。

妖怪集結（後書き）

なんか微妙な出来具合になってしまいました。

戦闘

親父との通信を終えた後、俺はすぐに都市に向かっていった。

あの爆音、あれは外壁への攻撃だろう。

いくら外壁が頑丈であろうともあの大きさだ。きっと抜かれたのだろう。

そうでなくともかなり削れているはずだ。

内部の人間はパニックに陥るだろう。必ず。

そして月への移住を早めるだろう。

だが、パニック状態に陥った人達をうまく整理するのは難しいだろう。

そうしているうちに人が次々に死ぬはずだ。

更に妖怪が人間側の武器を使い始めたら最悪だぞ。

俺はそう言い、時間短縮のために、

新たな力、霊力を足に貯め始めた。

その頃の都市外壁部。

「殺せ、殺せ、殺し尽せ！逃げる奴ごと殺せえ！」

妖怪のリーダー格、烈火は見事外壁の破壊に成功していた。

（長年妖力をためてよかったぜ。）

烈火は心の中でそう思っていた。

ぶち壊した外壁から仲間達を送り込みおわった烈火だが、

勢いだけは止まらない。勢いだけは止めてはならないのだ。

基本的に数、戦力が違う自分達が負けるのは分かっていた。

それでも多く殺すためには勢いで進むしかなかった。

この奇襲とも言える襲撃で相手が混乱しているうちに削るしかないのだ。

最終的に死ぬのは自分達だ。それが分かっているからこそその行動だ。現にかなり殺した。一瞬のうちに数万。今もどんどん増え続けている。

向こうの兵にも数千程度削られたが、まだこちらが押ししている。

ならやることは簡単だ。暴ればいい。

そう思い俺は人間の大群に突っ込んだ。

「よし。」

足に靈力を溜め終わった俺は都市の方向、穴のあいた外壁を見た。

「いくか。」

俺は今から跳ぶ。

そう、跳ぶのだ。

少し小高いところにいる俺は、

「防御結界、想像、実現。」

そう言って、俺の前に盾を展開した。

これは速度に耐えるためである。

今足に溜まっている靈力を爆発させると、ものすごい速度が出るだろう。

それに耐えるためだ。

そして展開し終わった俺は、都市とは逆方向に足を向け、

靈力を爆発させた。

ものすごい速度で翔ぶ。

足が熱い。それは爆発させたんだ。熱いだろう。

そう思いつつ俺は足にまた霊力を溜め始めた。

もうすぐ妖怪達の上空だろうか。

そう感じた俺は足を空に向け、防御結界に霊力を込め始めた。

そして妖怪たちのちょうど上空の前あたりで

足の霊力をまた爆発させた。

そのまま俺は妖怪達に突っ込んだ。

烈火は焦った。

後ろの方に何か落ちてくる音がしたからだ。

後ろは仲間の妖怪だけでこんなことができる奴が居ないと

知っているからだ。

もし挟み撃ちにあつたら自分らはすぐ負ける。

それは、それだけは避けたいのだ。だから戦力をひとつにまとめているのだ。

1対1にぶつかり合いなら互角以上で戦えるから。ただひたすら進むだけだから。

そうしてきたからこそ相手の屍も味方の屍も進んだあとしか残らない。

後ろから敵が来たら、戦力が分かれる。それじゃあ負ける。負けてしまう。

我らは妖怪。力だけは強い。

なら、嵐のごとく攻め、嵐のようにこの世を去ろう。

ただ吹き荒れる風のように。被害だけを残す天災のように。

だからこそ進む方向は1つ。

そう決めたのに。そう決めたのにッ！

なのに、なのにッ、なににどうしてッ！

俺は突っ込んだ。何も考えず。ただそこに。

そして結界を破裂させた。

周りは飛ぶ。妖怪が飛ぶ。

妖怪は俺を攻撃する。俺は避ける。ただそれだけ。

そして俺は想像する。

武器を。こいつらを殺す。ただひたすら生命を狩るための武器を。

幻想を。こいつらを還す。ただ天に魂を送るために。

それは夢、妖怪を救うためのただ今だけの。

この時だけのための武器。全ての生命を浄化する。

消えた者たちを祝福する。

そんなことは夢のまた夢。そして不可能な幻想。

だからこそ俺は想像する。

それを成し遂げるための奇跡を。

さあ今こそ

！

《実現》

！

全てをの魂を、夢を救え。

「このひと振りには救うために。」

己の心を形に。

「心刀、夢救　　。」

この刀が具現化した瞬間。

すべての妖怪は恐怖した。

自分を確実に殺すものの存在に。

それと共に安堵した。

自分を、自分達が救われる。ということに。

そして俺は動いたすべての妖怪を殺す（救う）ために。

俺は斬る。妖怪を斬る。

どれだけ血にまみれようとも。どれだけ血を流そうとも。刀を振ることだけは止めない。

屍は俺の後に。ただひたすらに殺し（救い）続ける。

そして烈火は恐れた。

己の後ろの生命に。

屍だらけの道に新たに屍を作りながら進む一つの生命に。

恐怖から生まれた妖怪が恐怖したのだ。

それと共に烈火は安堵した、

この自分を止める存在に。

今の気持ちは全くわからない。

これは恐怖（安堵）なのか。

それとも安堵（恐怖）なのか。

分からない。分からない。分からない。

自分を殺す者に感謝をすべきか？

それは違う。

では、自分を救う者に感謝をすべきか？

それはそうだ。

ではその両方の者には？

答えが出ない。

分からないのだ。今までこんな奴はいなかった。

分からない。だから狂う。

力がある。故に迷う。

だからこそ考えることが出来なくなる。

不器用ゆえに判断できぬ。

どちらにしる止まれないのだ。

もう仲間ほとんど死んだ。

ならば最後くらいは派手に行こう。

ただ前に進むために。

誰かに覚えていて欲しいから。

もう人間は殆ど月へ行っただろう。

残っているのは兵隊くらいだろう。

いや残っていないかもしれない。

しかしそんなことは考えなくていい。

俺のやることは殺す（救う）こと。

すべての妖怪（生命）に死（救済）を。

だから俺は斬る。斬って、斬って、斬り続ける。

妖怪も後僅かだろう。

そう思って進むと一回り大きな奴がいた。

おそらく、いや、絶対こいつが大将だろう。

もう周りには屍しかない。屍しか残さない。

残るは俺と屍、それだけだ。

「さあ、俺がお前を殺して（救って）やる。」

そう言うと相手は炎弾を放ってきた。

俺はそれを避けつつ近づく。

体はもう限界に近い。相手もそうだろう。

だが退けないこいつを殺す（救う）ために。

近づくと相手は火を放ってくる。

しかし俺は止まらない。ギリギリで避け、さらに近づく。

相手がさがるが間合いを詰める。

そして相手は炎弾を放ち。爆発させた。

しかし俺は前に跳ぶ。

そして爆風に乗り相手を斬る。

その斬撃は相手の右肩を捉え、右腕を切り離した。

だが相手は左手で炎弾を放つ。

どうやら右腕一本じゃ止まらないようだ。

俺は放たれた炎弾に対して突っ込んだ。

左手に霊力を纏わせて抜けたが。火傷したようだ。

しかしそのまま相手に向かって走る。

そして相手にあと2メートルのところまで相手は炎弾を放った。

避けきれない。そういう攻撃だった。

相手はもう力尽きるだろう。これは最後の攻撃だろう。

俺の体は勢いに乗っている。これじゃ絶対当たる。

そうしたら俺は死ぬだろう。

だからこそ俺は前に出た。

防御結界の盾を斜めの状態で展開して。

そして俺は相手の左肩から心臓ごと斬るように思いっきり振り抜いた。

相手はまっぴたつになった。

もう再生しないだろう。

あと俺がやることは一つ。

祈りを込める。

この刀に祈りを込める。

この屍たちが救われるように。

そう祈りを込めて、俺は刀を破壊した。

これはもう必要ない。

この刀はこの時だけのものだから。

もうここには用はない。

俺は少し疲れた。

行くところはあそこしかない。

そう思い、俺は最初にいたあの洞窟に向かった。

洞窟の周りには草が生い茂っていた。

入口がどこかは全くわからない。

と思っていると、草が左右に動き始めた。

まるで道を作るように。

そこを進むと洞窟の入口があった。

周りの草はまるで主人を案内するかのよう動いていた。

その通りに進むと。あれがあった。

そう。世界樹の苗木だ。

俺はこれを何百年放置したのだろう。

俺が完全に忘れていても、こいつは俺を覚えていた。

まだ1m位で幹も細いが少し育ったようだ。

そして俺は眠ることにした。

今度は少し長く眠るだろう。

そして、月から放たれたであろうものの爆音を最後に、俺の意識は途絶えた。

ただ、俺が相手を斬るとき、相手は「ありがとう」「と呟いたように見えたのは俺の気のせいだろうか。

第一章

完

『こいつはなんともまあ無茶しおったのう。』

しかしこれから寒くなりそうじゃ。

目が覚めるまで、色々サポートしてやるしかないのう。

.....それにして、

こいつの成長速度で行くと、

そのうちワシを越す日が来るのもそう遠くないかもしれんのだ。

もともとこいつには神になる素質があったようじゃし。

あと足りんのは経験と信仰あたりかのう。』

戦闘（後書き）

やっと終わりました。長かったですよ。
この次からは諏訪大戦の辺りを書きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9490z/>

規格外の行く道（仮）

2011年12月31日02時50分発行